KEIZAI DOYUKAI

報告書

より良き教育現場の実現に向けて

―交流活動実践 10 年の思い―

公益社団法人　経済同友会

目　次

はじめに　…1

◆第1章
1. 中学生に望む　…3
2. 高校生に望む　…8

◆第2章
1. 教員に望む　…13
2. 校長に望む　…19

◆第3章　保護者に望む　…23

◆第4章　国と地方に望む
1. 国に望む　…30
2. 地方行政に望む　…32

◆第5章　企業・経営者に望む　…35

終わりに　…38

2009年度「学校と企業・経営者の交流活動推進委員会」委員名簿　…39

資料編

1. 交流活動の目的　…47
2. 主な出張授業のテーマ　…53
3. 生徒の感想　…67
4. 「学校と企業・経営者の交流活動」実績表(1999年度～2009年度)　…77
5. 各地経済同友会の「交流活動」の状況　…81
6. 「教育フォーラム(第1回～第4回)」記事　…85
   (機関紙『経済同友』)より抜粋
7. 中学生、高校生の皆さんへ　…99
   ・「お薦めする本」
   ・「応援メッセージ」

はじめに

1999年、私たち経営者の草の根活動として始まった本会の「学校と企業・経営者の交流活動」は、2009年度で活動10年の節目を迎えた。現在、119名(2010年3月現在)の経済同友会メンバーが本委員会に属し、中学生や高校生などを対象とした出張授業に出向いたり、教員や保護者の研修会等で講師を務めている。経営者自らが10年間にわたり組織的に教育現場に足を運び、参画する取組みは、世界的にも珍しく、世界に誇れるユニークな活動になっており、改めて継続は力であることを実感している。

ちなみに、昨年度（2009年度）の実績は、「講師派遣件数144件・講師延べ人数300名」であり、1999～2009年度の10年間の実績を合計すると「1071件、延べ2027名」に達している。

この間、私たちは子どもたちに直接、世の中の変化や実際の企業活動、仕事の苦労や面白さ、働くことの意義、夢や目標をもって前向きに生きることの大切さなどを伝えて来た。また、社会は多様な個性を持つ人々が多様な仕事をする場であり、お互いが協力し、役立ち合うことで成り立っているという社会の基本的な仕組みも伝えて来た。さらに実社会では、多様な生き方があることを伝え、子どもたちが広い視野から自分自身の将来を考える契機や情報を提供して来た。私たち経営者が自分自身の実体験から得た知見を直接子どもたちに語りかける出張授業は、私たち自身にとっても多くの刺激を受け、改めて多くのことに気付かされる学びの機会となっている。と同時に、後日、学校から届けられる感想文を読んでも子どもたちにとって貴重な経験となっていることが分かる。子どもたちの感想文は、私たちの活動を継続するエネルギーとなっている。

また、学校の先生方には世界の変化、社会や企業の実情を伝え、自己啓発・自己変革を支援することを目指してきた。同時に、私たちが学校現場の実情を理解し応援することで、先生方の意欲を高め、教育現場の活性化につながればという思いで、活動に取り組んできた。多くの先生方が日々創意工夫しながら教育に真剣に取組まれていることも理解できたし、その情熱と努力にも勇気づけられた。こうした先生方に敬意を表したい。しかし、残念ながら一方で問題が存在すると思われる現場も幾度となく経験した。

本報告書は、過去10年間にわたる交流活動の実践を通して得られた私たちの“肌感覚”の気付きと日頃の思いをストレートに記述している。私たちは経営者であり、学校を常なる職場としていないため、主観的過ぎるとか、事実認識に偏

りがあるなどのお叱りを受けることは覚悟しているが、私たちの思いを取り纏めたこの報告書が、今後の教育現場の改善に役立てば幸いである。

なお、本報告書では、教育が本来担うべき目的、目標や方向性、取組み姿勢、目指す姿などに重点を置くように留意した。現在の教育現場では過度に、ハウ・ツーやマニュアルに重点が置かれ、本来、教育が目指すべき姿や本質論への議論が不足していると感じているからである。

今後さらに、グローバル化が進展し、多様化する社会で、子どもたちが活躍できるようになるために、教育を改善し続ける必要がある。いつの時代も子どもは社会の宝であり、未来を築いて行く主人公であり、チャレンジャーである。私たちの活動が、そんな子どもたちのために、学校・教員、家庭・保護者、地域社会に、これまでの10年とは一味違った貢献が出来れば光栄である。私たちは、今後とも、経営者ならではの視点で本活動に真摯に取り組んで行く所存である。

公益社団法人経済同友会
学校と企業・経営者の交流活動推進委員会

第１章

１．中学生に望む

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　主なメッセージ　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

- 生きがい（人生の目標）を探そう
- チャレンジ精神を持とう
- “基本”を大事にしよう
- 人とのつながりを大事にしよう
- 本物と接し、本物から学ぼう
- 身近な人の仕事ぶりを見よう
- 今打ち込めることがなければ、まずは勉強しよう

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＜はじめに＞

私たち経営者は、なぜ中学生に語りかけるのだろうか。昨年多くの中学生に歌われたNHK合唱コンクール中学生課題曲「YELL(いきものがかり)」の一節からも、多感な中学生の将来への期待と不安を読み取ることができる。誰しも中学生ともなると、漠然とした不安とともに、自分は何者なのか、何のために生まれ、何をすれば良いのかといったことについて考え始め、自我の意識が芽生える。多くの中学生にとっては、まだ自分の将来は漠としたものであろうが、中学生には外からのメッセージを素直に吸収する柔軟性がある。出張授業を通じて、私たちがこれまで歩んできた職業・人生経験を、中学生へのメッセージとして、直接伝えることができれば、大きな成果が期待できると信じる。

知識や技術の習得は学校教育に任せることが出来るだろう。しかし一方で、“自己”を意識し始めた中学生が自立のために心を鍛えるには、家庭・地域の役割や責任が重い。ところが、核家族かつ両親共働きといった家庭が少なくない今日、家庭教育が行き届かないことが多いのも現実である。私たちの出張授業は、このギャップの一端を補っている。人生の先輩として私たち経営者から、多様な仕事や人生経験を聞くことで、中学生は自分なりの社会での役割についての思いを深めてくれるものと確信している。

不安の有無に関係なく、誰にも、やがて自立という巣離れの時が来る。私たちは、それに備えて中学生の今から以下のようなことを準備して欲しいと考えている。

・現在は、どのような世界で、未来の世界はどう変化するのか、自分なりの“世界を見る目”を身につけよう。

・自己を確立するため、人生の目標を探そう。目標が見つからなければ、好きなこと、得意なことに情熱を傾け、自分の個性や特性を磨こう。

・今後、中学生の皆さんが飛び込む社会・世界では、どのような現実が待っているのか。自分自身で見聞きし、正確に認識するように努めよう。
・仕事とは？働くこととは？など、自分に適した職業は何か、自分が理想とする将来の姿を考えよう。

私たちは、一人でも多くの中学生が自分なりの活路を見出し、自分の将来についての不安を解消できればと願っている。そして、一人ひとりの中学生が自分の良さを知り、個性を伸ばし、自分にとって最適な人生を歩んでもらいたい。

なお、「高校生に望む」の章でも、私たちの考え方、将来への願いなどを述べているので、ぜひ参考にしてもらいたい。共通することも多いと思う。

＜より良い中学生であるために＞

生きがい（人生の目標）を探そう

生きがい（人生の目標）を見つけることは一生の課題である。これを持つか持たないかで日々の生活が大きく変わる。自分の将来も大きく変わる。中学生の皆さんは、将来の目標をまだ持っていないかもしれない。しかし、生きがいを求める姿勢は、年齢に関係なく大事である。私たちが直接語りかけることで、人生の目標作りに取り組む契機となれば嬉しい。

目標が分からなければ、“自分の好きなこと”、“自分が得意なこと”に懸命に取り組むことで道が開ける。スポーツをするのでも、漫画を描くのでも、クラブ活動などでも、自分が打ち込めることに熱中すれば、そこに達成感が生まれ、生きがいにつながって行くだろう。

また、慣れ親しんだ世界を離れ、新たな環境で多様な体験をして欲しい。成功し、歓喜に酔うときもあれば、失敗して苦々しい思いをするときもあるだろう。そうした経験をすることで、自分には何が適し、自分の特長は何なのか、外部とどんな関わり方をすれば最も素晴らしい貢献ができるのか、分かるようになる。一歩踏み出すか、踏み出さないかで差がつく。

私たちは、出張授業を通じて中学生に目標作りや夢を持つことの大切さを提唱してきたし、今後も支援し続けたい。

チャレンジ精神を持とう

目標の実現に向けて、勇気を持ってチャレンジしている中学生は素晴らしい。心からエールを送りたい。高い目標に果敢に挑戦し続けることは、自分をより高い存在に押し上げ、人生をより良いものにする。私たちも、チャレンジ精神を持ち続けて仕事に取り組み、今日まで生きてきたし、これからもそうあり続けたいと願っている。

ゴルフの石川遼君をはじめ多くの若者に、なぜ私たちは感動を覚えるのだろうか。それは、基本に忠実で、その上に、挑戦、実行、忍耐、日々改善し、切磋琢磨する姿を見るからだろう。イチローにせよ、石川遼君にせよ、名選手は、一瞬の幸運では生まれない。彼らの成功は、絶え間ない努力とそれを支える情熱の結果である。私たちは、経営者ならではの視点で、今後も中学生を大いに支援したい。

“基本”を大事にしよう

いつもテストで90点を取れれば、学校では秀才だろう。しかし、仕事は10回に1回間違ったら落第の場合もある厳しい世界だ。学校を出ただけでは、すぐ仕事を任せてもらえないのも分かるだろう。どのような仕事でも生半可ではできない。人生も同じである。重要なのは、基本がしっかりしていることである。そうでないと思わぬ失敗につながる。

将来に備えて中学生の今からぜひ実行して欲しいことがある。それは“基本”を大事にすることである。簡単に見えることでも、間違いなく繰り返しできるようになるには、粘り強く習練し、鍛錬する忍耐力と努力が必要である。それにはまず、簡単なことから始めよう。例えば、早寝早起き、朝ご飯をきちんと食べるなど、当たり前のことを、当たり前に実直に進めることだ。つまり、生活態度を見つめ直し、規則正しい生活をすることが“基本”である。成功に近道は無い。ひとつの基礎が出来上がり、次の基礎に結びつき、やがて、プロとしての熟練に結びつく。私たちは、仕事はマジック(手品)ではないと知っているし、そんな経験をしてきた。私たちの経験や知識を君たちのこれからの人生の中で活かしてもらえれば、大変嬉しい。

人とのつながりを大事にしよう

どのような仕事も、他の人とのつながりが大事だ。自分だけが楽しい、面白いのでは、趣味としては良いが仕事ではない。他の人のためになることをし、評価され、感謝してもらって、初めて仕事になる。人が喜んでくれれば、そのお礼として報酬が払われる。報酬は結果であり、目的ではない。仕事は人のためにするものだということを強調したい。また人が喜んでくれれば、自分自身

も満足感を味わえる。自分自身がこの世に生を受けた存在意義にもなる。

今の中学生は、放課後の塾通い、遊びは携帯型ゲームと、外の世界とのつながりが薄くなっている。私たちの子ども時代と比べても、諸外国と比較しても、今日の日本の特異性が際立つ。本やパソコンを通じて得られる知識はもちろん否定しない。ましてや教科書で学ぶ基礎知識は必須だ。しかし、そのままでは、生きる力にはならない。自分の人生そして社会にとって有意義かつ有用な力にするには、人との関わりや対話を通じて、知見に高めていく必要がある。

中学生の皆さんには、先生やクラスメイト、部活動の先輩・後輩、さらには社会人等との関わりなどを通じて触発されたり、時には摩擦が起きて思い悩んだりするといった実体験をして欲しい。自分と異なった経験を持つ多くの人と交流することで、自分自身を確かめ、高めよう。

本物と接し、本物から学ぼう

私たち経営者が中学生の頃は、何かを知ろうと思ったら本を読むしかなかった。例えば外国のことを知りたければ旅行記を読んだ。当時の写真は白黒で、ぼやけていた。今や、インターネットがあれば、家にいながらにして、きれいなデジタル画像で美しい外国の風景が簡単に見られる。世界遺産や美術品もバーチャル鑑賞できる。簡単に見ることができるのは大いにプラスだし、知識も広がる。しかし忘れてはならないのは、本物には何者にも置き換えがたい味わいと感動があるということである。

感動のない人生はつまらない。本物は、私たちの五感に直接、熱く語りかけてくる。五感をフルに使って鑑賞し感動してもらいたい。本物は世界遺産や美術品に限らず、工芸品、生産品、商品などにもある。それらは、すべて本物の人の汗、努力、忍耐、感性、技能の結集である。中学生には、本物の味わい・感動をぜひ体験してもらいたい。そうすることで、自分自身が本物になっていく。

先生や保護者には、子どもたちが多感な時代に本物を見る機会をたくさん得られるようにしていただきたい。

身近な人の仕事ぶりを見よう

中学生の皆さんが、仕事をすることの意味を理解するのは容易ではないだろう。まずは仕事のイメージを掴んで欲しい。それには身近な大人の働きぶりを観察することを薦める。例えば、お父さん、お母さん、親戚の人、そして近所や地域の人なども良いだろう。もちろん先生たちも観察の対象になる。“親父の背中”を見て、その仕事ぶりに感心するだろう。時には“反面教師”となるかもしれない。そんな経験が重要だ。それら全てが、仕事に対する正しい理解、

感覚を育てるのに役立つ。

私たちが出張授業で話す仕事・人生観も、仕事に対する理解を深めるために役立つと思う。ぜひ活用してもらいたい。

今打ち込めることがなければ、まずは勉強しよう

生きるとはどういうことか、将来何をしたいのかについて、すぐに答えが出せるようなことは、普通はあり得ない。中学生の多くは、いま直ちに何かしたいことがないかもしれない。しかし、何をしたら良いか分からない人は、まずは勉強をして欲しい。人間は一生にわたり勉強するものだし、基礎的な準備さえあれば何歳になっても新しいことを始められる。勉強したことはいつかどこかで必ず役に立つ。焦らず、今という瞬間・瞬間に最善の努力をして欲しい。そうすれば、道は自然と開ける。

2．高校生に望む

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　主なメッセージ　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

- 論理的に考える習慣をつけよう
- 社会常識を身につけよう
- 人としての基本的な人格を形成しよう
- コミュニケーション能力を磨こう
- 生きがい、目標をもち、その先に働くことの意義を見出そう
- グローバルな視点と身近な地域への関心を持とう
- 日本語力、英語力(外国語力)を高めよう
- 近現代史と全教科にわたる基礎学力を身につけよう
- 時事問題への関心と読書の習慣をつけよう

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＜はじめに＞

高校進学率が97パーセントに達し、高校生であることは“当たり前”となった。高校生活に特段の積極的な意義を見出すことは、今の高校生にとっては、難しくなっている。多くの高校生にとっては、高校は大学進学のための準備段階となっているのが現実だろう。一方、少なからぬ高校生が、卒業後ただちに社会へ出て働き始めるのも事実である。

いずれにせよ、中学生時代と比べて、高校生にとっては、職業や社会がより身近に迫っている。加えて、高校生時代は、年齢的にみても、“自己”の確立、いわゆる大人になることを目指して、大きなステップを踏む重要な時期である。

＜より良い高校生であるために＞

私たちは、数多くの高校生と接する機会を持ち、多くの高校生が自己探求し、自己の確立に苦心しつつも、真剣に努力している姿を間近に見ることが出来た。実に嬉しく思っている。多くの高校生が目指す高校生像は、基本において私たちのものと大差ないと感じるが、この機会に、私たちが思う活き活きとした高校生像について語り、共有したい。なお、前章の「中学生に望む」も参考にして欲しい。

論理的に考える習慣をつけよう

自分は何者であるかを見つめ、自らと対峙する高校生に会うと、私たちは感動を覚えるし、支援をしたいという思いに駆り立てられる。そんな高校生は、周囲の声、意見に柔軟に耳を傾けつつも、自分でじっくりと考える習慣を身に

つけている。悩み考え抜くことは、物事を系統立てて論理的に発想し展開できる力、また帰納し演繹する力を身につけるために大事なプロセスだし、大変有意義なことである。しかし、時として迷い、苦しむこともあるだろう。そんな時は、周りに働きかけ、周りの意見を取り入れつつ、正しい判断をしてもらいたい。自分だけで考え込み過ぎないことが重要だ。細切れの知識、脈絡のない思いつき的発想に陥らず、友人や、先輩である教師、保護者など、周囲にいる人に相談し、論理的に考えて将来を切り拓く真の力を培ってもらいたい。

教師や保護者とは異なる存在である私たち経営者の意見も、きっと役立つと思う。

社会常識を身につけよう

高校生ともなれば、社会生活を営む上での基本的な常識を身につけなければならない時期である。しかし、残念ながら、現在の高校生の多くは、私たちが高校生であった時代と比べると、社会常識に乏しいと言わざるを得ない。事実、学校を訪ねると、外部からの訪問者である私たちとどう向き合うか、どう挨拶すべきかなどを含め、戸惑っている高校生に出会うことが多い。

社会常識は、まず礼儀、挨拶に始まる。学校の内外を問わず、多様な個人が集まった社会の中での、良識ある振舞い方(マナー等)を身につけることが重要である。社会に出る前に身に付けていなければならない基本である。

人としての基本的な人格を形成しよう

大人になり社会で生きていく上で、各種の能力よりはるかに大切なものがある。それは人倫の基本ともいうべき、誠実、勇気、正直、思いやり等、いわゆる“人格”、“人柄”を形成する要素をしっかり身につけることである。

生半可な実務能力などより、“人格”、“人柄”は、将来の社会生活、職業生活において重要である。

まず簡単なことからはじめて欲しい。嘘をつかない、相手の気持ちになって考える、いい加減な態度で物事に臨まない、前向きに考えるなど、基本的なことから毎日の生活で実践してもらいたい。

コミュニケーション能力を磨こう

自分一人でできることは極めて限られる。社会に出て仕事を始めれば、誰しもが痛感することである。仕事＝人間関係、社会＝人間関係と言っても過言ではない。

高校時代に、他人とのつながり、絆をしっかり持ち、友人の輪を拡げ、苦楽を共にし、悩みを分かち合うことは、他に代え難い貴重な経験になる。そのた

めにも、コミュニケーション能力を養い、磨くことが重要である。ケータイ、ゲーム全盛の環境下で育った世代にとっては、読む、書く、そして何より相手と目と目を合わせ直接対面し、相手の話を聞き、自分の意見を述べ、相互に理解し合うことの大切さを認識して欲しい。

私たちは出張授業で、単に話を聞くだけでなく、私たちの話に反応し、質問や意見を積極的に提起する高校生に出会うと嬉しいし、更なる支援をしたいと思う。

生きがい、目標をもち、その先に働くことの意義を見出そう

勉学、クラブ活動、サークル、趣味、友人関係といったことでも良いし、憧れの職業に向かって今から励むといったことでも良い。日々の生活の中に、目標や生きがいを持つか持たないかで、その人の将来は大きく違ってくる。ぜひ、自分の得意技を活かせる目標を作って欲しい。

その延長線で自分の将来の目標を描いてもらいたい。夢と言い換えても良い。高校生ともなれば、何らかの形で、自らの将来、とくに自分が働くことについての具体的イメージを思い描くことが可能であろう。夢に橋を架け、実現に向けての具体的な道筋を想定してみることが重要だが、夢をより具体的なものにするため、そして、もっと可能性のあるものにするため、先生など周りの人々の話を参考にしてもらいたい。自分の天性、適性を客観的に把握し、どのような仕事が自分にとって最適なのかと考えて欲しい。

相談すれば、喜んで相談に乗ってくれる人は多い。周りの人の経験と知見は貴重だ。例えば、実際に社会に出て働くとはどういうことか、そのためには高校生の時からどのような心構え、準備が必要か等、分からないことは遠慮せず相談してもらいたい。

世界や日本の多種多様な分野の人々と接してきた私たち経営者の実体験も、大いに参考になるはずである。臆せず声を掛けて欲しい。私たちは、多いに貢献したいと思っている。

グローバルな視点と身近な地域への関心を持とう

経済をはじめ、あらゆる面でグローバル化が今後ますます進展する。世界の中の日本、世界の中の自分を常に意識することが必須となる。

グローバル化した社会の中で調和し、同時に競い合って生きていくことへの自覚と能力が求められる。今後、グローバル化とまったく無縁で生きられる職業、人生はほとんど無い。ぜひ、国際的に通用する見識を身につけた日本人を目指して欲しい。今から、グローバルな視野・関心を持ち、努力し続けることは、将来活躍するために、必ずプラスになる。

ただし、グローバル化は無国籍化ではない。私たちは現実には、国家の一員として生きている。国家を否定した世界はあり得ない。高校生は、やがて成人として国民の権利を享受し、義務を担う日も近い。国民としての自分、国と自分の関係について思いをめぐらし、国家はどうあるべきか、自分はそれにどう関わり貢献していくのか、といった発想を持つべき年代である。グローバルに活躍するためには、自国の文化や歴史への理解はもちろんのこと、身近な人々との共生、自分の住む地域への強い関心も不可欠な要素である。

日本語力、英語力(外国語力)を高めよう

人は国に住むのではない、国語に住む、と言われる。思考、発想、感情等は、すべて自分が使う語彙の枠内からしか出てこない。母国語すなわち日本語をいかに広く、深く使いこなすかが基本であり、母国語を大切にして欲しい。日本語の持つ良さや特徴、日本語で最も輝く独特の概念、文化、行動など、日本語を是非、マスターし、大切にしてもらいたい。教科としての“国語”を超えて、日本語力を徹底的に磨くことは、外国語を学ぶ大前提になる。

他方、グローバル化が一層進展する中で、外国の人々とのコミュニケーションの重要性はますます高まってくる。世界共通語になりつつある英語で意思を通じあうことは、私たち日本人にとって苦手とされるが、これからはそれでは済まされない。英語に代表される外国語で会話できる力を身につけて欲しい。

私たちは、母国語と外国語の二つの文化を同時に経験できる日本人は幸運だと思う。一方の文化（言語）の下では、疑問にならないことが、他方の文化（言語）では疑問になる。結果的により深い理解が可能になる。一つの文化圏では味わえない違った感性を味わうことも可能になる。また、一つの言語ではうまく表現できないことを、他の言語で的確に表現し、理解することも可能になる。こんな例は枚挙に暇が無い。言語の違いが、社会、風土、文化等の違いでもあることに理解を深めつつ、異なる言語、文化を理解する喜びを高校生に感じてもらいたい。

近現代史と全教科にわたる基礎学力を身につけよう

高校の歴史教育は、往々にして近現代史に辿り着く前に終わってしまうのが現実らしい。ところが、私たち日本人が外国人と、特に近隣諸国の人々と接する際に、先方は格段に豊富な近現代史の知識を持っている。その中には、真実も誤解もあろうが、残念ながら、私たちの情報量では、相手を説得するだけの問題提起と明解な解決策の提示ができないため、互いに理解を深め合う会話が成り立たないケースが生じる。それが、問題を余計に難しくしてしまう。若い人同士の場合はより顕著であろう。歴史認識は極めて微妙な問題であるが、近

現代に何が起こったのか、基本的な事実関係をしっかりと学んで欲しい。私たちが、近隣諸国の人々と接する際に経験する困難と困惑を、現在の高校生には将来、経験して欲しくない。

同時に、大学入試科目に関係なく、文科系に進む生徒も理数科系の科目を、理科系に進む生徒も社会科学系の科目を、関心を持ってきちんと履修して欲しい。いわゆる“リベラル・アーツ”（一般教養）をしっかりと学ぶことが、将来活躍するための基礎・土台となる。

時事問題への関心と読書の習慣をつけよう

政治、経済、社会問題等、時事問題に関心を持つことも重要である。学校で学んだ知識と、現実に見聞きする事実がうまく合致すると感激を得られるし、自己研鑽にも役立つ。また、理解を超えた現象に触れることは、好奇心を誘発し、自らの自覚と成長を促す。新聞に目を通し、自分なりの視点と解釈を持ってニュースを見る習慣を身につけて欲しい。

読書も重要だ。忙しい高校生活の中でも時間を作り、読書の習慣を身につけ、読書で得られる感動、楽しさを知って欲しい。それが、新しい友人を得ることに繋がったり、サークル活動(部活動)の幅を広げたり、高校生活の楽しさを深めることにもなるだろう。当然、将来に備えた自分の人格形成にも役立つ。

知的好奇心は人を成長させる。知的好奇心に満ち溢れた高校生は、時に難しい質問を投げてくる。私たちもすぐに回答できないこともある。人と人との関わりから受ける触発はお互いに貴重だ。また、私たちは出張授業の後に送られてくる生徒の感想文に目を通し、新たな発見をすることもある。私たちの交流活動の喜びである。

第２章

１.教員に望む

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　主なメッセージ　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

- 教育に情熱と使命感を持つ
- 子どもたちに自身の夢を語り、夢を持たせる
- 子どもの個性を尊重し、考える葦を育てる
- 子どもたちに実体験をさせ、活き活きとした教育を実践する
- 保護者と正面から向き合い、家庭と学校の役割について認識を共有する
- 外部との接触を通じて自己研鑽する

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＜はじめに＞

先生方との話の中で、先生方が異口同音に問題と考えられておられることに、生徒とともに過ごせる時間が少ないということがある。学校教育は、社会の変化に伴い、情報・環境・福祉・キャリア教育など新たな課題への対応が求められ、また、複雑な家庭状況から生ずる多様な子どもへの対応も求められ、加えて、行政府から種々の事務処理などが求められている。しかし、学校にはそれらの課題に対応する人的・物的体制が十分に整っていないようだ。

時代の要請による新たな課題については、私たちの長年の経営経験から支援できる内容が沢山あると思う。私たちは、経営者ならではの視点で、今後も先生方を大いに支援したい。先生方には、教育という現場を聖域にすることなく、広く外の世界に支援を求めて欲しい。

一方、保護者の教育に対する偏った理解についての問題もある。保護者の中には、“教育は、より良い学校への入学、そして、より良い企業への就職、より高い収入を保証するため”と認識している人が少なくない。気持ちは分かるが、私たちは、それが子どもを幸福にすることには直結しないと考える。現実に、企業も単に出身校で採用を決めることは無くなって来ている。ましてや教育の本来の目的はそこには無い。

教育の主たる目的の一つは、“世の中に貢献する人を育てること”だと私たちは考えている。良い大学へ入学させることや、大きな企業に入社させることは、教育の目的とは思えない。ぜひ、教育の本来の目的を見失うことなく、“自分の人生を活き活きと生き、社会に貢献することを人生の喜びと感じること”のできるよう、中・高校生を育ててもらいたい。妥協すること無く、信念と情熱を持って、基本を忠実に実行する先生であって欲しい。

＜より良い教員であるために＞

このような状況下で、教育とは何たるかをしっかり見据え、自ら率先して質の高い教育を実践しておられる先生方が多く存在する。保護者や世間の教育の目的と手段を間違えたような発想に困惑している先生方とは一線を画す先生方である。私たちが訪問し、話を伺った先生方から感じた素直な感想と思いを以下で述べたい。

なお、「保護者に望む」の章もぜひ参考にしていただきたい。

教育に情熱と使命感を持つ

教育は、未来の社会を担う子どもたちを育てる、極めて重要な仕事である。教員には、そうした仕事に直接従事しているという醍醐味と同時に使命がある。先生方には、日々、情熱と使命感を持って取り組んでいただき、この先生冥利を十二分に享受してもらいたい。そのために、本活動を通して、私たちが先生方を支援できれば幸いである。

具体的には：

1) 先生には、“リーダーシップ”を発揮していただきたい。
   リーダーには、情熱と自信、限りないエネルギー、そして高い志が必要である。
2) 未来を担う子どもたちを育てるプロとしての自覚と自信をもって欲しい。
   先生には、使命感を持って、目の前の子どもたちや保護者の要求・願いに応えるだけでなく、世界や時代の流れ、次代のあるべき姿や方向性を予見し、教育のプロとして毅然と指導して欲しい。
3) 教育とは、人が人を教えることでもある。人は、相手の目を見て、燃えるような情熱を傾けないと、なかなか真に心を開かない。生徒が心を開くよう自分自身を高めていただきたい。

子どもたちに自身の夢を語り、夢を持たせる

グローバル化が進み、多様な価値観が混在する現代社会において、若者の多くは、将来の夢が描きにくく、自分に自信を持てなくなっている。これは、私たちが学校現場に出向いて感じることの一つである。この課題は社会全体で解決すべきことであるが、毎日、生徒に声を掛け、生徒を身近に知る立場にある先生の存在は大きい。親にも相談できない相談を受けることもあろう。そんな時には、先生自身の経験や生徒の知らない世界について語り、どうあるべきか

について方向を示し、生徒に考えさせて欲しい。

同時に、生徒に夢を求めて欲しい。そのためには、日々接している大人が夢を語り、自分が目指すものについて、熱く語ることが重要である。まずは、先生自身が自分の夢、生徒への希望などをストレートに語りかけて欲しい。活き活きと生徒に語りかける先生は、きっと生徒に尊敬されるし、生徒も活き活きとしてくるはずである。生徒たちは、そんな先生を求めていると思う。

具体的には：

1) かつてW・S・クラーク先生が生徒に語りかけた「ボーイズ・ビ・アンビシャス」なる言葉は、生徒の心を熱くし、生徒たちが自分自身の将来の役割を全うするきっかけとなったと言われる。この言葉が生徒の心に響いた背景には、日頃から先生が生徒に夢や希望を語り続けていたことがある。是非、先生方にはそんな灯台のような存在であって欲しい。日頃の先生自身の実践が、言葉に力を与え、生徒の心に響き、生徒の行動を左右するであろう。
2) 指導に当たっては、先生が生徒の個性や良い点を見つけて、動機付け、勇気付け、時として褒め、時として叱ることで、生徒は自分自身の存在価値を確認できるし、自分の人生の方向性を見つけ出す。
3) 先生自身が“世界観（社会の将来像）”を持ち、それを生徒に語ってもらいたい。例えば、“グローバル化とは、一体自分たちにどんな影響を与えるか”などについて、先生の考えを語ることが重要である。生徒が自分なりに自分の将来についてのイメージを持つ機会を作ってもらいたい。生徒のやる気や夢作りの第一ステップになるはずである。
4) 夢を持つことの重要性を説き、生徒に夢を求めてもらいたい。まずは、先生自身の夢、どんな人生を送りたいか、どんな先生になりたいか、どんな生徒を育てたいかなどを生徒に語って欲しい。

   次に、壮大な夢を持つことの大切さを説いて欲しい。歴史上の英雄とか、著名なスポーツ選手・科学者などは、夢に向かって努力し続け、苦難を乗り越えてきた。そうしたことを生徒と語り合ってもらいたい。
5) 生徒の夢を実現するためのプロセス（夢実現計画づくり（PLAN）、夢の実行（DO）、進行の評価と軌道修正（CONTROL）の実践）で良き相談相手として支援してもらいたい。夢は簡単には達成できない。困難も山ほどある。失敗もある。苦々しい思いもある。私たちにも、人生の岐路で救われた一言、先輩からの触発が必ずある。先生方の積極的な支援を期待する。
6) 地域社会の人や先輩に遠慮なく協力を仰いで欲しい。

   私たち経営者は、どんな夢を持って生きてきたか、どんな苦労をして

きたか、何が転機になったか、私たちが見てきた世界はどんな世界なのかなど、中学生、高校生が日常知ることのない経験を語り、情報を提供することは可能だ。私たちはこうした分野で先生方を応援したい。

子どもの個性を尊重し、考える葦を育てる

“人は皆違う”、“人と違う考え方や意見を持っていることは素晴らしいこと”という基本的姿勢で、子ども一人ひとりの個性を伸ばすよう努めて欲しい。これからの時代は、多様な個性が互いに他を触発することにより、個人も社会も成長・発展する多様性（ダイバーシティ）の時代である。

具体的には：

1) 私たちは、授業が過度にマニュアル化されてきているのではないかと懸念している。生徒一人ひとりの“個”を重視した教育を目指してもらいたい。
2) 個性を“ルールを無視した自分勝手”と履き違える向きがある。これは残念なことである。先生には、個としての“権利”は、決して社会の一員としての“責任”をないがしろにしては成り立たないことを、生徒や保護者に力強く説いて欲しい。
3) 金太郎飴の組織や社会は一見、整然と見えるが、変化に弱い。
これからの変化の激しい時代に、強い個性と独創性は必須である。生徒の数だけ個性があり、その個性に合った人生があり、職業があり、それらが一体となって社会が形成される。先生には、学級をオーケストラのような集団に作り上げる努力をお願いしたい。あえて、“ごつごつとした強い優れた個性”の集団を作り、それぞれがぶつかり合いながらも、最終的には指揮者の下で、ハーモニーを奏でるような集団は素晴らしい。これが多様性の強みである。先生には最高の指揮者になってもらいたい。

子どもたちに実体験をさせ、活き活きとした教育を実践する

これからの社会を生き抜くためには、教科書で学ぶ知識のみでは十分でない。さまざまな実体験・経験を通して生きた知恵としなければならない。ぜひ、生徒が実体験で発揮する五感を大切にし、そこから生徒が感じ取った感覚や、発する声に耳を傾け、先生自身の体験・経験に照らし合わせて、指導・育成して欲しい。

具体的には：

1) まず先生自ら率先垂範して欲しい。企業においても、優れたリーダーは自ら先頭に立って実践する。

2)生徒が実体験から何を学んだか、体験できた喜びとはどんなものなのか、次にどんな実体験がしたいかなど、生徒に主体性を持たせた運営をしていただきたい。実体験を通した知的創造は生きた知恵となり、そんな子どもたちは活気に満ちている。

3)成功体験も重要だが、むしろ、失敗から何を学ぶかが重要だ。挫折を経験したことのない人間は脆い。生徒には、失敗を恐れず、新しいものに果敢にチャレンジさせて欲しい。

4)生徒参画型の体験授業の支援をしている企業もあり、外部資源を活用することも薦めたい。

保護者と正面から向き合い、家庭と学校の役割について認識を共有する

基本的な礼儀や社会生活の常識、人間としての品格などは、第一義的に家庭教育によるところが大きい。家庭に期待する役割については、「保護者に望む」の章で述べるが、先生方には、是非、保護者と正面から向き合い、家庭と学校の役割分担について建設的に語り合っていただきたい。

イギリスの格言に、「馬を水辺に連れて行けても、水を飲ませることは出来ない」とある通り、教員の役割には自ずと限界がある。しかし、日々、生徒と向き合っている先生であるからこそ、具体的に家庭の役割で何が重要かをご存知のはずだ。その知見を保護者にしっかりと語り、情熱を持って接すれば、保護者との連携は可能だと信じる。

一人で難しい場合は、周りの先生や、校長、副校長、私たちなどの協力を仰いでいただきたい。

具体的には：

1) 私たちが活気があると感じる学校は、“基本”がしっかりしているという共通項がある。生徒が外部からの訪問者に大きな声できちんと挨拶が出来たり、整理・整頓・掃除が行き届いている学校である。他人に素直に感謝する気持ちも身に付いている。こうしたことは、家庭や保護者の日々の指導・協力なくしては難しい。

2) 家庭教育の重要性が特に強いと思われるものについては、「保護者に望む」の章を参照いただきたい。うまく行っているケースでは、家庭と学校の役割分担と協業が成り立っている。

3) なかなか学校行事に参画しない保護者については、保護者同士が連携したり、地域全体で子どもを育てる仕組みを作るなど、二重、三重の取り組みを求める必要がある。

4) 人としての基本的な資質の涵養については、是非、学校内部に留まらず、外部の人的資源を有効に活用していただきたい。先生方の積極的な取り

組みを期待する。

外部との接触を通じて自己研鑽する

生徒を教育することは、自身の研鑽でもあると考える。先生の自己研鑽が、さらに生徒の成長を促す。このプラスのスパイラル（自己増殖作用）を構築することが必要だ。世の中に完璧な人間など存在しない。完璧な存在ではないからこそ、人は日々成長できる。自分の殻に閉じこもっていては大きな世界が見えないし、大きな仕事もできない。

先生には、教育現場を隔離すべき聖域と考えずに、勇気を持って外へ飛び出し、広く社会の活力と知恵を取り込むよう行動して欲しい。学校教育を支援したいとの志を持つ人は多数いる。そんな方々との積極的な交流により、視野を広げ自己研鑽に役立てて欲しい。日々の研鑽の成果が、授業に対する生徒の興味をより深いものにし、授業を魅力的で効果的なものとする。

具体的には：

1) 私たちの交流活動も大いに活用いただきたい。支援・貢献したい経営者は多い。
2) 眠っている生徒がいれば、それは自分の責任だと考えると、改善の意欲がわいてくる。私たちは、諦めないで試行錯誤を繰り返し、日々改善を心がけ、生徒に向き合う先生方と出会うと感銘を受ける。
   千篇一律の授業を行っていては、生徒はついて来ないし、生徒に成長を求めることは難しい。企業も日々血のにじむような現場改善を継続しないと顧客に飽きられ、存続できない。どこの世界も同じである。
3) 学校教育においても、企業が日々活用する経営ツールなどが参考になると思う。例えば、PDCA（plan（計画）-do（実行）-check（評価）-action（改善））サイクル、目標管理、スキル管理、キャリア管理、マーケティング手法、人材育成など、活用していただきたい。
4) 私たちは、先生方を対象とした研修会での講師も務めている。先生方が異業種の世界に触れ、見識を広げるのに貢献出来ればと考える。また、先生の職場体験を受け入れている企業もある。

2.校長に望む

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　主なメッセージ　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

- 学校経営に情熱とビジョンを持つ
- 校長という職位をスタートラインと捉える
- 学校の最高経営責任者と自覚し、世界と社会の変化を積極的に取り込む
- 教員を活かし、モチベーションを高める
- 学校と社会とを繋ぐ“架け橋”としてのリーダーシップを発揮する
- 生徒の手本となり、“道徳教育”の要となる
- 組織運営の管理能力は、職位に就任した瞬間から発揮する

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＜はじめに＞

世界がグローバル化の進展をはじめ、前代未聞の変化をしている今日、この変化を前向きに捉え、次代に活躍できる人材の育成を担う教育の役割は大きい。子どもたちには、将来、活き活きとした職業人、社会人として活躍してもらいたい。校長にはそのような生徒を一人でも多く育成できる学校現場の創造と教員の育成に注力してもらいたい。

一般的に世間では、学校における校長は、企業における社長・最高経営責任者のように受け止められている。その方が分かりやすいからであると考えるが、実際には、大きな違いがある。この違いは、公務員としての教員、営利を目的としない教育、教育委員会や文部科学省の強い影響を受ける組織としての学校の位置づけなどをはじめ、依って立つ法的根拠や歴史の違いによるところが大きい。また、公立と私立による違いもある。したがって、基本的な条件が学校と企業とでは異なることを認識する必要がある。しかしながら、現場を預かる組織のトップとして、校長の現場での影響力は絶大であり、企業の社長・最高経営責任者との共通項も多いと感じている。

私たちには、校長先生のリーダーシップの下、学校改革が成功した例も多く見聞してきたし、制約が多々あることは承知しているが、実感として、校長の存在は、企業トップのそれと同等のものであると感じている。と同時に、“学校現場からの教育改革”が、現在の校長に求められている使命ではないかと考える。私たちは交流活動を通して、そのような多くの校長先生と出会うことができたことは、何者にも変えがたい喜びである。それらの校長先生に共通することは、“出来ない理由”はさておき、本来の目的である、より良い教育の達成のために自身が如何なる貢献をすべきか、真正面に問題を見据え、情熱を燃やし、学校改革をビジョンをもって推し進めておられることである。

以下では、この10年間、私たちが交流活動を通して出会った校長先生の中で、

積極的に改革に取組んでおられる校長先生と、残念ながらそうとは受け取れない校長先生の違いに焦点を絞って述べる。

なお、「保護者に望む」の章も参考にしていただきたい。

＜より良い校長であるために＞

学校経営に情熱とビジョンを持つ

校長として任された学校をどんな学校にしたいか、どう経営し、運営するのか、ビジョンを持つ必要がある。多様化した社会において、世界で通用する卓越した個性を発揮する人材は、明らかに、過去の延長線からだけでは生まれない。校長先生が自身の言葉で、ビジョンを明言し、学校経営にあたる必要性はそこにある。

企業を例にとると、他社と同じ商品しか提供できない企業は、厳しい競争を強いる市場で生きてはいけない。自社の製品は、安全基準など公的基準は当然満足しつつ、他社にない特徴を明確に訴求することが要求される。学校も同じで、そこで学ぶ生徒は、当然日本人としての最低必要条件を満たした上で、自身の個性・特性を最大限に生かした“味”を出すことが重要である。学校もまた、各々の“味”を出す必要がある。どんな生徒に育てたいか、どんな学校にするのか、どう学校を運営するか、など校長自身が未来像を描き、それを生徒、先生、保護者、地域社会に示す必要がある。全ては、ここからスタートする。羅針盤のない船は、蛇行を続けるだけで、目的地には到達できない。

校長という職位を、スタートラインと捉える

校長という職位を終着点として捉え、任期中は無事に済めば良いと考えると何の進展も無い。教育の目標は、世界・社会の激しい変化のもと、教育現場での絶え間ない改善・改革をもって達成されるものである。校長はそれを実行し続ける実践者であることが求められている。校長任期中は、プレーイング・マネージャーとして、より良い教育達成の実践者で有り続けていただきたい。校長就任は、実践のスタートラインに立つことである。

具体的には：

1）　経営力を磨く

校長の経営力は、教員の指導力や生徒の学力を左右する。

2）　後継者育成

後継者育成に取り組んでいるのか、疑問に感じる場合がある。

行政府の仕事だと切り捨てず、校長自ら後継者育成に努めることを任務の一つと認識して欲しい。後継者育成は、日々監督してい

る校長が最も効率よく進められるはずである。

3）　学校運営の仕組み作り

一部の学校で実施されている、副校長二名制を敷くことも有効と考える。

学校の最高経営責任者と自覚し、世界と社会の変化を積極的に取り込む

現行の制度上、校長に許された権限の面から疑問を挟む方もおられるが、校長には、学校（教員・生徒・保護者）を導く強い権限と責任がある。私たちは、校長が情熱と覚悟を持って学校経営にあたるか否かで大きな差が生じる幾多の例を見てきた。

“現場への権限移譲”を消極的に理解するか積極的に理解するかで、改革に取組む姿勢が大きく変化する。消極的に捉える校長の下では、学校教育は、世界の変化に遅れをとるし、活き活きと活躍できる人材も育ち難い。ちなみに、私たちが学校を訪問したとき肌感覚で感じる“学校の活力”も出てこない。高い志と理念を持ち、目標に向かって、改革を推進されている校長先生には感銘を受けるし、先生、生徒が活き活きと活動している。改革に積極的な校長先生の下で教育に携わることができる先生方は幸せであり、生徒や保護者にとっても大きな恩恵となっていると感じる。

教員を活かし、モチベーションを高める

子どもたちは、日々、接する教員からさまざまな影響を受ける。良き師との出会いは、その子にとって一生の宝となる故に“教育は人なり”と言われる。先生方には、自身の全人格をかけて子どもたちの成長のために情熱を注いでいただきたい。

その前提には、教員自身の使命感、モチベーションの維持・向上が必要となる。先進的な校長先生の多くは、自身の研鑽を継続し、現場の教員の指導・育成、能力開発に、積極的に取り組み、教員のモチベーションの向上に努めている。また、社会で培われた最先端の経営ツールや知識、また、他校の先進的な事例等を学び、日々の運営に活用し、成果を出している。この点で私たち経営者が協力できることも多いと思う。

学校と社会とを繋ぐ“架け橋”としてのリーダーシップを発揮する

学校経営を改善していくには、保護者をはじめ地域・社会との連携が不可欠であり、具体的には、学校の実態や課題についての認識の共有、学校と家庭・地域・社会との役割分担などが必要である。これらは、校長のリーダーシップなくしては前進しない。基盤が築かれれば、長期にわたる教育の質の向上につ

ながり、脈々と引き継がれていく学校のDNAとなる。

教育は、他の世界とは異質な世界であり、学校はそれ自体で完結すべきであるという閉鎖的な考えをもった校長も少なくない。

ぜひ、校長先生には、学校と異なる世界との交流を積極的に進めて欲しい。

現在のように激しい変化の時代では、“従来通りは後退”と理解し、過去の慣習から自分自身と、教員を解放することにリーダーシップを発揮して欲しい。

実際、私たちの活動を受け入れる校長先生の多くは既に実践されており、そのような学校の先生方は明るく、積極的で、好奇心が旺盛である。それが学校全体の活力として感じられる。

生徒の手本となり、“道徳教育”の要となる

道徳教育の真の目的は、“人間としての価値の継続的向上”にあると考える。それには、指導要領に基づく教材での単なる知識供与だけでは不十分である。

校長は教育者であると同時に、生徒にとって“将来のありたい姿”を体現している“社会をリードする大人の代表”であり、手本である。社会での具体的な行動に通じる“心”を率先垂範している校長の存在が、生徒の道徳教育にも大いに貢献する。本来、教員全てがそういう存在であることが理想であるが、全ての教員にこれを望むのは現実問題として難しい。校長先生に道徳教育の要としての役割を果たして欲しい。

組織運営の管理能力は、職位に就任した瞬間から発揮する

学校教育において、経営・管理能力は不要であり、教育は別なものであるという考え方を時折、耳にする。しかし、学校がそれらと無縁で良いという時代は過ぎた。公益を担う組織の発展の源泉となる“組織運営・管理能力”は、校長に就任した瞬間から発揮して欲しい。そのためには、校長になる前から、常に自身の研鑽に意識的に努めいただきたい。

第３章　保護者に望む

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　主なメッセージ　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

- 世の中が大きく変化していることを理解しよう
- 子どもに“一人の人間”として接しよう
- かわいい子には旅させろ！
- 子どもの個性を尊重しよう
- 社会の一員としての基本を身につけさせよう
- 地域社会や学校活動へ参画し、支援しよう
- 子どもとのコミュニケーションを増やそう
- 感受性・感性を涵養しよう
- 『待てない』『褒めない』『やらせない』の３ナイを払拭しよう

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＜はじめに＞

一人ひとりの子どもが、個性と可能性（能力）を十二分に活かし、自らの進路、広い意味でのキャリア（人生）を選択し、自信を持って生きがいに取り組み、人生を全うできることが望ましい。また、子どもが他人への思いやりを持ち、社会の一員として、他と共存・協調しながら、生きる姿勢やマナー、人間的魅力を身につけることが望ましい。それには、家庭での教育が大変重要で、保護者は、責任を持って子どもを指導し、励まし、勇気づけ、子どもが実りある人生を送るために必要な知識、技術、生きる力を身につけさせて欲しい。

特に、現在の複雑多様な時代、氾濫する情報や商業主義のメディアの影響のなかで、自分で考え、適切な判断を下す力を備えた、芯のしっかりした子どもに育て上げることは、並大抵ではない。にもかかわらず、この役割を、ひとえに学校に期待する風潮がある。しかし、これは学校だけで実現できるものではなく、家庭での教育が不可欠である。

日本では、かつて地域社会と一体となり、祖父母や父母が子育てに心身ともに力を注いできた歴史がある。人間とはどのようなものなのか、その拠り所とすべき規範とは何か、優れた人物の生き方や信条を子どもに聞かせ、自らも“子は親の背中を見て育つもの”と身を正していた。かつての日本の家庭では、それを気負うことなく日常生活のなかで、折に触れ、自然体で行ってきた。現在、このように自然に行われていた家庭での教育が希薄になっていることは残念である。

社会が急速に変化し、企業活動も一層のグローバル化が進み、新興国の追い上げも強まる中、今のままでは日本の将来が懸念される。日本の将来を担う若者が、知識や技術の習得ばかりでなく、“人間力”とも言うべき基礎力を身につ

けることが必要である。人間が生きることと社会との係わり合いへの理解を深め、自主独立の精神で新たな革新へ取組む必要があり、社会人になる前に、そのベースとなる、精神的、人間的な成長を遂げることが不可欠である。ここに、保護者や家庭が意識して果たすべき役割があると考える。

＜よりよい保護者であるために＞

子どもあるいは保護者が望む“人生における成功”とは、“心身ともに健康”で“自分の個性を活かし”つつ“世の中のために役に立つ”充実した人生を送ることであろう。これを理解し、子どもがその方向に育って行くよう、指導・支援している保護者が存在すること、また、そんな保護者と教育を語る機会を多く持ちえ得た私たちは幸せだと感じている。しかし、同時に、全ての保護者が必ずしもそうではないことも事実である。以下は、私たちが保護者にお願いしたいことである。「子は親の鏡」。全ての保護者に担ってもらいたい役割である。

世の中が大きく変化していることを理解しよう

私たちの生活を取り巻く環境は激変し、保護者の皆さんや私たちが子どもであった時代とは様変わりした。経済や政治はもとより、地球環境、新興国の台頭による国際関係、インターネットなど情報技術や携帯電話などのコミュニケーション手法などが大きく変化し、さらに加速していくと思われる。

かつての“有名大学に入り大企業に就職すれば一生安泰。幸せな人生が送れる。勉強はそのためにするもの”といった考え方は、通用しなくなったと言って良い。これからの新しい時代における子どもの教育で大事なことは、子どもが夢や目標を持って自分の人生を築き、自立する意欲と、そのために必要な能力(基本と応用力・問題解決力)を身に付けさせることである。

私たちは、交流活動の一つの目的として、世の中の変化を正しく伝えることを挙げている。保護者の皆さんが、交流活動を活用し、普段耳にすることの少ない実業界の動きや私たち経営者のものの見方・考え方に触れ、参考にしていただければ幸いである。

子どもに“一人の人間”として接しよう

子どもを“一人の人間”として認め、愛情を持って見守り、伸びやかな発想や感受性を大事にしてやっていただきたい。子どもは、自分で考え、行動し、成功や失敗を経験することで、生きる力と自信を身につけていく。ただし、依然として未熟な部分を多く持つ子どもゆえ、正しいことと正しくないことの区

別や、思慮に欠ける部分への助言、指導などは、威厳と自信を持って保護者として指導すべきである。未熟な子どもであるからと、大目に見る、あるいは無責任な形で子ども任せにしては、間違ったメッセージを子どもに送ることになる。

具体的には：

1) 自分で考え、自分の意見を持つことを励まし応援する。また自分の意見を臆せず発表することも奨励する。
2) 何事も“目的を持って始めること”が重要であると、認識させ、実行させる。
3) 自分で決めさせる。決めたことに責任を持たせる。うまく行かなかったときには、なぜ失敗したかを考えさせ、叱るのではなく、二度と同じ失敗をしないために何をすべきかを考えさせる。
4) 小さなことでもそれが出来れば、評価し、褒め、次への前向きな自主性・意欲を持たせる。子どもに成功の歓喜を味あわせたい。

かわいい子には旅をさせろ！

これは、言葉通り、ただ旅をさせれば良いという意味ではない。子どもにとって、真に有益な実体験をさせることである。現在、多くの子どもが、保護者や学校の過保護の下で、温室育ちになり、生々しい実体験をすることなく社会に出てきている。結果的に自分が育ってきた環境と実社会の乖離に驚き、悩み、苦しむ結果になることもある。

実体験とは、自分自身で未経験の体験をし、予想外の事態や困難に出会ったり、努力してそれを克服したり、あるいは失敗の苦い経験をすることを通じて、成功の感激や失敗の挫折感、奮起などを、自分の五感で味わうことである。目的の達成に向けて苦しみに耐えることも学習すべきである。これにより、子どもは一回り大きくなり、自信を付け、自立した良き社会人に成長していく。

優れた指導者、経営者は、共通して、論理力、直観力、胆力をバランスよく持っている。直観力と胆力は、実体験を重ね、苦しくても諦めずに目的達成のために試行錯誤しながら頑張り抜き、最後に成功することで体得し、醸成されるものである。この実体験が人生では重要であり、人としての成長にも不可欠である。失敗を恐れて何もしないより、リスクをとって得られる恩恵の方がはるかに大きい。保護者には是非とも、子どもが自分で多種多様な実体験ができるよう導いてもらいたい。

具体的には：

1) 新たなこと、未経験のことへの挑戦を促し支援する。未知の集団（例えば外国人や他所の学校の生徒など）へ飛び込むような、異質の体験も貴

重である。子どもの力を信じて、やらせて欲しい。

2) 少し高めの目標に挑戦する意欲を育てる。子どもに限らず、人は失敗を恐れて安全な道をとることが多い。本人が考えている自分の実力よりも、少し上を目指し、達成することが、優れた実体験になり、自信と誇りを生み、更なるチャレンジへの意欲にも繋がる。

3) 前向きに物事に取組むよう指導する。何事も、前向きの発想なくして前進はあり得ない。世の中が前代未聞のスピードで激変している中、現状維持は後退することを意味する。保護者が、間違っても、“もし失敗したらどうするの?”などの問いかけをしてはならない。

4) 文字通り“旅をさせる”。その最高のものは、海外留学であろう。普段、親しく相談に乗ったり支援してくれたりする保護者や友人から離れて、自分を過去と異質の環境におき、自らの判断と決断で物事を処理しなければならない体験をさせることは、子どもの自立心と責任感を培うのに有効である。

子どもの個性を尊重しよう

“人は皆違う”、“人と違う考え方や意見を持つことは良いこと”という基本的姿勢で、子ども一人ひとりの個性を伸ばすよう期待する。また、これからの時代は、多様な個性が互いに触発することにより、個人も社会も成長・発展すること（多様性の時代）を、保護者も常に意識していただきたい。

具体的には：

1) 子どもの個性を、十分に尊重し、型にはめることのないようにして欲しい。

2) 子どもの持つ優れた能力を見つけ、引き出し、それを子ども自身が磨いて行けるよう指導して欲しい。

3) “世の中一般”や“皆がやっているから”という基準を意識させすぎない。

4) 人と違うことで、良いことをしたら、褒めてやって欲しい。

5) “普通”と“普通でない”という区別をさせない。外国人、ハンディキャップのある人、帰国子女等、皆それぞれ“個性を持った人”であることを、しっかり認識させて欲しい。

社会の一員としての基本を身につけさせよう

社会の一員として不可欠な礼儀やマナー、他人への配慮、責任感を身に付けさせる。これこそ、社会人となるための基本である。これらを身に付けさせるには、家庭が第一義的に責任を持つべきであり、家庭教育の最も基本となるところであると考える。これを学校教育に一方的に且つ全面的に求めるのは保護

者の自己否定と言える。

何が正しく、何が間違いなのかという基本的な判断力を養うためには、叱ることも必要だし、褒めることも必要である。往々にして、厳しい課題を子どもに与えることになるが、大人が心配するほど、子どもは弱くはない。そうして成長し、周りから信頼を勝ち取っていくことを願っている。

具体的には：

1) 学校と家庭の役割分担や協業が必要となる。
2) 家庭内での挨拶（おはよう、ただいま、おやすみなさい等）、感謝の言葉（ありがとう）を、保護者も子どもも、毎日実行する。
3) うそをつかない、弱いものいじめをしない、困っている人を助けるなど、人として、社会生活を営むにあたっての基本的なしつけ。また時として無責任な言動が、如何に周りの人に迷惑をかけたり、傷つけたりするかを理解させる。
4) 世の中の動きや社会の営みについて、折に触れ子どもに話し聞かせて欲しい。厳しい経済環境も、家計の苦労も、色々な職業についている親戚や友人の話、その他社会で起こっていることなど、率直に話して欲しい。自分の役割や責任、我慢しなければいけないことについて子どもが考える機会になる。妹や弟の面倒を見たり、保護者を手助けする気持ちも生まれ、自分の役割を認識する良いきっかけとなる。
5) 身近なことの手伝いをさせる。子どもが家庭で分担する役割を明確にし、毎日責任を持ってやらせる（食事の後片付け、洗い物、ごみ捨て、買い物や町内連絡版の回覧、弟妹やペットの世話など）。
6) 古典的な書物を通じて、「仁」「義」「礼」等について親子で学ぶなども、有効であろう。

地域社会や学校活動へ参画し、支援しよう

人間は一人では生きられない。家族があり、社会があり、国がある。それを支える仕組みとして、学校や地域社会や政府や企業がある。これらの活動に関心を持ち、出来るだけ参画、支援することの重要性を、親子で共有して欲しい。

人は一人で生活するわけではなく、自分が属する家庭、社会、国などに生かされている、つまり、相互に世話になっていることを認識すべきで、人の成長は、それらとの関わりがあって初めて達成される。と同時に、自分に合った責任の果たし方があり、その責任を果たすことが、自分が世話になった家庭、社会、国などに対する自分の義務である。このことを、子どもに十分に教え込んで欲しい。ただし、まず、保護者自身がそのように振舞うことが重要で、「子は親の鏡」である所以である。

最近話題になる「モンスター・ペアレント」は、自分の子どもにしか関心がない保護者の、学校（教員）や地域・社会への敬意を欠いた行動である場合が多い。保護者同士が互いに交流を持ち、理解し合うことで、前向きの解決を導くことを期待したい。

具体的には：

1) 地域の活動（祭りやバザーなど、各種行事）に参画する。できれば、可能な時に、可能な範囲で世話役やまとめ役を務める。責任ある対応を学ぶ良い機会になる。
2) ボランティア活動（出来る範囲で）の奨励、実践（親子ともに）。
3) 学校行事への参画と積極的貢献（教員とのコミュニケーション、提案、役割分担など）。

教員は多様な問題を抱えており、また年齢的にも若く社会経験が浅い場合もある。これを支援していただきたい。その際に、“自分の子ども”中心の目線でなく、他の子どもたちにも目を配った“クラス全体”あるいは、“学校全体”の目線でお願いしたい。

子どもとのコミュニケーションを増やそう

現代の若者の最大の問題は、コミュニケーション力に乏しいことである。携帯電話やコンピュータ、ゲーム機器などの普及もあって、交友範囲を狭く絞り込んだ、“心地良い仲間うち”だけで生きる傾向が強まっている。

初めて会う人とのコミュニケーションなどで、自分の意見を相手に分かるように伝え、意思の疎通がうまく出来るよう、日頃から、話し、聞き、意見を言う機会を増やすよう、指導していただきたい。

具体的には：

1) 忙しくても、子どもと話す機会を持ち、正しい日本語で出来るだけ論理的に話すことを促し、子どもの話を良く聞いてやって欲しい。それは、単にコミュニケーション力をつけるばかりでなく、相互信頼の向上に繋がる。
2) 保護者自身も、子どもに対して積極的に自分の考えを話し、子どもに意見を求めて欲しい。その場合に、保護者が上から押し付けることがないようお願いしたい。
3) “身近な大人”との会話を奨励して欲しい。同年代の仲間以外の他人、例えば近所の人、よく行くお店の人などとの挨拶や短い会話でも、コミュニケーション力や自信をつけることに繋がる。地域の集会などに子どもを連れて行くのも良い。

コミュニケーション力の基本は、“自分自身の意見を持っている”、そ

れを“臆することなく発表する勇気”にあることも、親子の共通認識とする。相手の目を見ながら、相手の表情、身体全体の表現を感じとりながら、直接会話することが極めて重要である。

感受性・感性を涵養しよう

一般に日本の若者は感受性に乏しい、と言われることが多い。絵が好き、音楽が好き、などという子どもはもちろん多いと思われるが、義務教育で、そうした科目や時間数が減る傾向にある中、また、自然との接触が限られている環境下で、家庭で意図的に感受性・感性の涵養を大事にする生活が期待される。日常生活を取り巻くあらゆるモノ、コトへの好奇心と感動もきわめて重要である。

具体的には：

1) 美しいものを鑑賞し、感動を大事にする。美術展や音楽会、あるいは家庭でゆったりした雰囲気で音楽を聴くといった機会を増やす。読書も重要。自分が体験しない世界への想像力が広がる。
2) 自然の営み、四季の変化、新緑や紅葉の色、匂いなどを感じたり、話し合ったりする。生き物を大切にする心を大事にする。
3) 芸術や創作活動に興味を持つ子どもには、それをより引き出したり、磨く機会を与える。
4) 実体験で得られた感覚が、感受性と感性を育てることになる。自分で経験した喜び、悲しみ、怒り、他人への感謝、他人の素晴らしさ、自然の雄大さなど、すべてが人間形成の素地として不可欠なものである。

『待てない』『褒めない』『やらせない』の３ナイを払拭しよう

最も重要なことは、中学生の段階から、自立への意識を持たせることである。自分の人生をどう作っていくかは、自分の責任であることを理解し、それに基づいて考え、意欲を持って行動するように導いていただきたい。子どもが、自分で考え、行動できるようにするために「三つの“ない”を自粛せよ」という名言がある。“待てない”“褒めない”“やらせない”の３ナイを払拭せよ！

第４章　国と地方に望む

＜はじめに＞

これから求められる人材像については、“グローバリゼーション”、“国際競争力”、“世界で通用する”、“自立した個性”、“自分自身で考える”等々をキーワードとして語られるが、少なくとも私たちが聞く限りにおいて、求める人材像に根本的な差はないように思える。また、教育改革も実施され、変化も起きつつある。

しかしながら、課題も多く存在する。以下は、私たちが学校現場を訪問し、先生方との会話や現場の状況などを垣間見、直接感じたことを踏まえ、国、地方行政府に望むことである。

１．国に望む

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　主なメッセージ　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

- 教員が現場で生徒と直接向き合う時間を増やす
- 補助教員もしくは補助的役割を担える人材を学校に派遣する
- 社会の変化を、的確に学校改革につなげる

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

教員が現場で生徒と直接向き合う時間を増やす

教育は、大きな方針、制度のみを国が決定し、教育実践の内容の大部分を、都道府県以下の地方行政府に任せることが最善であると私たちは考える。総論では、その方向に国も賛成している。しかし、現状は、なかなかそうなっていないようで、教育現場の先生の多くは、現状の学習指導要領の下で、現場の自由度はあまりないと感じられているようだ。そのことが、地方の創造性と独自性を妨げていないかと懸念する向きもある。

私たちは、学校現場で、多くの先生方から、生徒の指導に加え分掌校務に時間を取られ、生徒と向き合う時間が十分取れないという声を聞いた。国の認識と現場の乖離が大きいと感じる。実態を学校毎に調査、分析することを望みたい。その結果に基づいて改善策や判断基準を現場へ権限委譲することで、改善できるのではないかと考える。

現在は、教科書、カリキュラム等、ほとんどを国が決定しているため、地方はどうしても国に依存する体質になってしまっている。しかし近年、一部自治体で新しい取り組みが効果をあげていることからも明らかなように、地方にも充分に改革の実行力がついてきている。活性化した自治体の学校は、活気に満

ちている。地域のニーズを大事にし、個を尊重した生徒の育成、教員の育成を進めている。私たちは、そんな現場の知見がうまく生かされると良いと考える。企業経営でも、現場への権限委譲で効率よく仕事がはかどるようになるのは事実であり、各地域、学校が創意工夫し、アイデアと成果を競い合い、お互いに刺激し合い、改善を継続できるようになれば望ましい。

補助教員もしくは補助的役割を担える人材を学校に派遣する

私たちが学校現場を訪問して感じることは、先生方に余りにもゆとりがないことである。先生方が一人ひとりの生徒に向きあったり、新しい企画などに積極的に取り組むには、最低限の基盤が必要である。ところが、社会が激変する中で、家庭崩壊や極度の学校への依存、外国籍の子どもの増加、発達障害や引きこもり、特別支援を要する生徒の増加など、日々先生方を悩ませている状況に驚かされる。小１、中１プロブレム、学級崩壊、いじめ・不登校の問題などは起こるべくして起こっているのではないかとすら感じる。教員志望者ならびに校長等管理職希望者の減少、病気休職する教員の増加などから見ても、教員が厳しい状況に置かれているのは明らかである。

各学校への、必要に応じた補助教員および補助的役割を担う人材の派遣が急務である。これなくしては、子どもたちと直接向き合い、一人ひとりの成長に情熱を傾け、教育することは難しい。国・地方行政に強く期待したい。

具体的には：

外部の人材を教育の現場に入れることへの不安を耳にすることがあるが、出来るところから始めれば良い。例えば、子どもの理科離れが大きな問題になっている。この背景には、理科を教えられる教員の不足がある。ある調査では、小学校教員の85～90％が理科嫌いであるとの結果が出ている。外部人材を大いに活用して欲しい。特に大量退職期の団塊の世代の技術や知識を柔軟に活用してほしい。

社会の変化を、的確に学校改革につなげる

社会の変化と同時に、求められる人材も変化している。学校教育は、この変化のスピードに対応できていないと懸念する。

例えば、商業高校・農業高校・工業高校等のあるべき姿や学校でのカリキュラムは、時代に対応できているのだろうか。科目内容が長期にわたって変わっていないケースがあり、これらの職業高校で教える知識は、現在の産業界が求めるレベル、内容と食い違ってきているのではないかとの懸念を現場の先生方から耳にする。高度成長期に求められた知識と、IT、グローバル化、バイオ、環境などで急激に変化した今日に求められる知識は、当然変わってきている。

加えて、最近の職業高校の卒業生の多くは大学等に進学しており、準普通高校になってしまっているのではないか。

改めて存在意義を見直し、早急に適切な改革を行う時期になっていると思う。

2．地方行政に望む

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　主なメッセージ　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

- 教育への体系的アプローチを推進する
- 教育改革のパフォーマンス・チェックの仕組みを作り、公表する
- 地方行政がリーダーシップをとる
- 保護者に対する“子育て教育”を推進する
- 子育てのために、地域の教育力、人的資源を有効に活用する

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

教育への体系的アプローチを推進する

これまで学校には経営はなかったといわれる。しかし、時代は大きく変わり、近年、学校経営が注目されるようになり、改革が始まっている。しかし、改革はトータルのシステムとして取り組まなければ、期待する成果は出ない。目的は良くても実行が伴わなければ失敗に終わる。

初めにビジョンがあり、それに基づく行動・実行プランが策定され、それを達成する仕組みとして経営プロセスがあり、実際に実施する人的資源の確保がある。この一連の流れを一部分のみの改善で終えることなく、全体が有機的に体系化され、改革に結び付くことが重要だ。このシステム全体という見方がなかなか難しいようだ。

具体的には：

1) 第一歩としてビジョンの明確化と共有化

今どんな教育が望まれているのか、地方自治体レベルでの再定義と明確化が必要であろう。これが全ての基盤であり、これ無しでは、次の段階に進めない。

世界そして日本がどう変化し、将来はどうなるか。今の生徒に何が不足し、何を期待するか。今までの教育で足る部分と、不足する部分、捨てる部分と追加する部分は何なのか、何にプライオリティーをおくべきか。これらを明確化し、関係者の間で共有することが重要である。

2) 先進的な例に学ぶ

すでに、教育改革に成果を出している地域が増えてきたことは心強い。先進地域の成功例（ベスト・プラクティス）から大いに学び、取り込ん

でいただきたい。それぞれ固有の制約や地域の歴史の違いなどあろうが、参考になるはずである。

3) PDCA の経営プロセス作り

実施段階では、適切な経営プロセスが必要になる。世の中には、既に多様な経営手法が存在する。(例：ベンチマーキング、ベストプラクティス、PDCA サイクル、評価システム)。教育現場でもそれらを共有し、使いきれるようにして欲しい。私たちの活動も活用していただきたい。

4) 人材の育成と確保

何をするにも、最後は“人”であり、経営資源の根幹をなす。“やるべきことを成し遂げる”人材の確保が重要である。教員、管理職などの人材計画、人材育成、スキル研修などの仕組みとプログラムの充実を望む。

教育改革のパフォーマンス・チェックの仕組みを作り、公表する

現場に権限委譲を進め、教育の質を保証するためには、成果を正しく捉え、次のステップへフィードバックする新しい開かれた運営プロセスが必要になる。

ベストプラクティス手法、ベンチマーク、PDCA サイクル等が教育の現場でも語られるようになって来たことは勇気付けられる変化であるが、いまだ十分な効果を得るまでには根付いていない。

具体的には：

1）“見える化”の促進。現場の成功事例を広く公開し、共有する。政権の変化に左右されず、長期的な視野で教育の成果を公表し、進捗状況をチェックする仕組み作りが必要である。

2）現場の創意工夫を活かすには、立派な成果を上げているところから、相互に学び合うことが重要である。企業では、ベスト・プラクティスから学ぶことは常識になっており、ある特定現場の創意工夫の成功を、全体的な動きに進化させる仕組みとなっている。

地方行政がリーダーシップをとる

各地方で、多様な試みと、改革への鼓動が頻繁に聞こえるようになり、また成果が出ているところも見られるようになった。しかし、全国的に見れば、まだ一部に留まっている。

改革の成功例は既に存在しており、各自治体・学校は、是非これらを学ぶことから始めて欲しい。その上にそれぞれの現場に合った学校経営を実現することが重要である。地方行政府はそのための支援・仕組み作りにリーダーシップ発揮してもらいたい。

具体的には：

1）学校経営学塾の創設：

校長、副校長などの管理職から、学校経営についての知識、経験が十分でないという声をよく聞く。人材育成の柱の一つとして、管理職になる前に学校経営を広く学べる機会を創設（研修会、経営塾など）すべきではないか。

2）経営プロセスの見直し：

副校長二人制や、教育補助員導入など、多様な試みも成功しているようである。積極的に推進してもらいたい。

保護者に対する“子育て教育”を推進する

先生方は、保護者からの様々な要望とその調整に多大なエネルギー使っていると聞く。保護者との良好な関係を保ち、ニーズを反映した学校教育が推進されることは望ましいことである。しかし、いわゆる“モンスター・ペアレント”に代表される理不尽な要求も多々あるように聞く。

ある特定の保護者や子どものために、他の多数の子どもが十分な教育を受けられないようなことがあっては、社会全体として不幸である。今こそ、保護者を対象とした教育が必要ではないか。一部地方で実施されている保護者に対する「子育て教育」を各自治体で推進されては如何であろう。

子育てのために、地域の教育力、人的資源を有効に活用する

学校、家庭、地域が連携して、地域の教育力を高め、地域ぐるみで学校教育に関わることが求められる。例えば、町内会、子ども会、ＮＰＯ、商店、企業等の多様な人材を活用していただきたい。

問題は、受け入れる学校側が積極的でない場合があることや、意思があっても、学校と外部の資源をつなぐ仕組みが整っていないことである。

まず、学校自身がもっと社会に開かれた存在になって欲しい。学校以外から人的資源を求めることへの抵抗が依然として根強いと聞くし、出張授業に出向いてもそんな雰囲気を感じさせる先生に出会うことがある。社会に眠っている人的・物的資源を、支援者として有効に活用しようという積極かつ能動的な姿勢を学校と地方行政府に望みたい。

と同時に、地方行政府が学校と外部を結ぶ学校支援コーディネータの育成や人材バンク作りなど具体策を講じ、“学校と地域・外部支援を結ぶ仕組み”を組織的に推進していただきたい。

第５章　企業・経営者に望む

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　主なメッセージ　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

- 社会貢献の柱の一つとして教育支援を
- 従業員への啓発活動と意識改革を
- 経営者自ら教育への貢献を（一人一回以上の出張授業）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＜はじめに＞

国づくりは人づくり、すなわち教育である。「国は人なり」とも、「企業は人なり」とも言われるように、国家運営にとっても、企業経営にとっても、人材こそ最も重要な要素である。国家・社会をより良いものにするためには、教育の課題を抉り出して改善し続けなければならない。同時に、教育に多大の影響を及ぼす社会を、教育を支え、担うものにしなければならない。

＜経営者への願い＞

私たちは、社会的責任の一つとして、より多くの経営者が教育への更なる貢献に取り組むよう願う。社会の健全な運営のために教育に強い関心を持つのは当然であると考える。

社会貢献の柱の一つとして教育支援を

企業の社会的責任の追求は、昨今、素晴らしく進展している。そもそも経済同友会は、古くから他に先駆けて企業の社会的責任について提言し続けており、会員の意識も高い。しかしながら、日本では教育への貢献を企業の社会貢献の柱として挙げる企業はまだ少ない。

欧米では、多くの企業が社会貢献の具体的項目として教育への貢献を挙げている。社内外の広報文書などに頻繁に取り上げられ、年次報告書（アニュアルレポート）に取り上げる企業も珍しくない。

日本においても、より多くの企業が社会貢献活動の柱の一つとして教育支援を掲げ、社内外に積極的に取り組んで行けば、教育の大切さが社会全体に浸透していくと思う。

従業員への啓発活動と意識改革を

子どもを持つ従業員は、家庭では親としての責任を持ち、学校では、保護者という顔を持つ。しかし、授業参観に参加しない親が多いと聞く。

共働きなどの家庭が増えてきた結果、仕事のスケジュール調整が難しいという理由で、両親どちらも参加できない家庭も多いと聞く。企業の理解・協力や職場の意識改革で改善できる部分もあるのではないだろうか。保護者会、授業参観などへの参加を理由に、仕事を休むことに対する罪悪感や、上司に言い難い雰囲気はないだろうか。従業員のそのような活動に配慮を欠く言動が上司にないだろうか。

また、母親はあっても、父親の参加はほとんど無いようである。父親の教育への参画をはじめ、子どもを持つ従業員の教育への参画を促す意識改革と啓発活動を進めて欲しい。

一方、学校側の工夫も進んでいる。一部の学校では、保護者が参加できるよう、学校行事を夕方や土曜日に実施し、保護者の参加を促すところも出ている。

具体的には：

1)人事評価制度の運用改善

授業参観や学校行事に参画する従業員を、人事評価で減点するようなことがないように職場での意識改革が進むことを期待する。可能なら、学校教育支援に参画する従業員を人事評価で加点するポジティブ・アクションを取り入れていただきたい。

2)インターンシップ、職場体験の受け入れ・拡充

インターンシップ制度や職場体験の受入れなどを制度化している企業も多い。こうした機会は、生徒・教員の研鑽の機会となるばかりでなく、従業員にとっても研鑽の機会となっていると聞く。一度体験した従業員は、本人が日頃価値を見出していなかったことに新たな価値を発見したり、自分の仕事への誇りを改めて感じたりするようである。

生徒が職場体験で感激することには、企業では当たり前に日々こなしている業務が多い。例えば、銀行員が札束の紙幣を手際よく数える熟練の技に驚嘆したり、丁寧な言葉で真剣に顧客に対応する大人を見て感銘を受けたりする。そんな生徒の驚き、感激が、仕事への新たな興味や正しい認識につながり、自分の将来に思いを馳せることになるとともに、保護者の尊敬の念も生まれ、家庭でのより良いコミュニケーションにも繋がっていくことだろう。

経営者自ら教育への貢献を（一人一回以上の出張授業）

企業の経営者自らが、教育への貢献を率先することの効果は大きい。自らの出張授業を社内報などで社員に発信すると、おおむね良い反応が見られると聞く。企業イメージの改善、仕事へのモチベーション向上などの効果もあるようだ。より多くの経営者に、社内外で発信し、企業による教育支援活動を盛り上

げてもらいたい。

出張授業を経験したことのない経営者には、是非一度、教育現場に足を運び、子ども、教員、保護者と直接、接点を持っていただくよう願いたい。教育現場の現状を自分の肌感覚で捉え、教育への貢献を模索してもらいたい。

何世代も年齢の離れた子どもにどう話すべきか、果たしてコミュニケーションは可能であろうか、といった不安を感じ、参加を躊躇している経営者も多いかもしれない。しかし、そうした懸念は一度出張授業を経験すると、無意味なものであることが分かる。また、一度経験すれば感動を覚えるし、回数を重ねれば重ねるほど喜びが増す。子どもたちとの会話は楽しいし、新鮮な発見や感動もある。素晴らしい経験になると思う。

終わりに

これまで「学校と企業・経営者の交流活動」でお世話になった学校関係者の方々、また多忙な中、講師を務めていただいた多数の経営者各位、そしてそれを支え続けた経済同友会の事務局の方々に、ここで改めて御礼を申し上げる。過去10年間、有意義な活動を継続できたのは、ひとえに皆様方の多大なるご厚意とご尽力のおかげである。

なお、本報告書の文中で、関係者の皆様には多分に失礼極まりない表現となっているところがあるかも知れないが、現場で感じた私たちの率直な意見、感想であり、日頃、教育の改善、人材の育成に熱い思いを抱いて取組んでいる点で、志を同じくする者同士の見方の一つとして、ご容赦いただき、今後の教育現場の改善・改革に参考にしていただければ光栄である。

本報告書の作成過程で、私たちは教育関係者の方々と意見交換を行った。その中で、まだ私たちと交流のない学校関係者からは、私たち経営者の活動の立ち位置が良く理解でき、安心して本活動へ参画できるようになるとの意見を伺った。また、すでに交流のある学校関係者からは、単に生徒のみならず、教員、保護者に向かって語るよい教材になるとの意見をいただいた。これらはほんの一例である。是非、教育関係者の方々には、本報告書を多様に利用してもらい、教育現場のより良き改善にむけて役立ててもらいたい。

最後に、本報告書の作成に当たって副委員長各位には多忙な中、編集委員として取り纏めに多大のご協力をいただいた。岩下正副委員長、大塚良彦副委員長、尾原蓉子副委員長、小林恵智副委員長、前原金一副委員長、茂木賢三郎副委員長、吉村幸雄副委員長に、改めて謝意を表します。

公益社団法人経済同友会
学校と企業・経営者の交流活動推進委員会
委員長　　山　中　信　義

2010年3月23日現在

2009年度「学校と企業・経営者の交流活動推進委員会」

（敬称略）

委員長

山　中　信　義　　(ベインキャピタル・ジャパン　副会長)

副委員長

岩　下　　正　　(ﾛｰﾝ・ｽﾀｰ・ｼﾞｬﾊﾟﾝ・ｱｸｲｼﾞｯｼｮﾝｽﾞ　会長)

大　塚　良　彦　　(大塚産業クリエイツ　取締役社長)

尾　原　蓉　子　　(ＩＦＩ[(財)ﾌｧｯｼｮﾝ産業人材育成機構]
ＩＦＩﾋﾞｼﾞﾈｽ･ｽｸｰﾙ 名誉学長)

小　林　惠　智　　(ヒューマンロジック研究所　取締役会長)

前　原　金　一　　(昭和女子大学　副理事長)

茂　木　賢三郎　　(キッコーマン　相談役)

吉　村　幸　雄　　(シティグループ・ジャパン・ホールディングス
執行役員　ｶﾞﾊﾞﾒﾝﾄ･ｱﾌｪｱｰｽﾞ担当)

運営委員

木　村　廣　道　　(ライフサイエンスマネジメント　取締役社長)

近　藤　　章　　(富士火災海上保険　執行役社長CEO)

島　田　俊　夫　　(シーエーシー　取締役社長)

同　前　雅　弘　　(大和日英基金　副理事長)

永　山　妙　子　　(ファースト　エグゼクティブ　リミテッド
代表取締役)

林　　明　夫　　(開倫塾　取締役社長)

廣　瀬　駒　雄　　(ディレクトフォース　シニアフェロー)

藤　田　　實　　(オグルヴィ・アンド・メイザー・ジャパン
取締役副会長)

船　津　康　次　　(トランスコスモス　取締役会長兼CEO)

委員

青　松　英　男　　(DRCキャピタル　代表取締役)

淺　川　一　雄　　(ノバルティス ファーマ　取締役)

有　田　浩　之　　(ブラックロック・ジャパン　取締役社長)

池　田　彰　孝　　(ＳＭＫ　常勤監査役)

石　井　義　興　　(ビーエスピー　取締役)

石　川　裕　子　　(ノバルティス ファーマ　常務取締役)

市　川　俊　英　　(三井不動産　常務執行役員)

伊　藤　　守　　(毎日コムネット　取締役社長)

井　上　明　義　　(三友システムアプレイザル　代表取締役)

井　上　　健　　(日本電設工業　取締役社長)

井　上　ゆかり　　(キャドバリー・ジャパン　取締役社長)

岩　尾　啓　一　　(キャリア工学ラボ.　取締役社長)

植　村　裕　之　　(三井住友海上火災保険　常任顧問)

江　幡　真　史　　(セディナ　取締役副社長執行役員)

遠　藤　勝　裕　　(日本証券代行　取締役相談役)

小　江　紘　司　　(ＤＩＣ　取締役会長)

大　浦　　溥　　(アドバンテスト　相談役)

大　倉　　俊　　(ノエビア　取締役社長)

大　竹　美　喜　　(アフラック（ｱﾒﾘｶﾝﾌｧﾐﾘｰ生命保険)
創業者・最高顧問)

岡　田　民　雄　　(日本ルツボ　取締役会長)

岡　本　和　久　　(Ｉ－Ｏウェルス・アドバイザーズ　取締役社長)

奥井規晶	(インターフュージョンコンサルティング 取締役会長)
加藤丈夫	(富士電機ホールディングス　特別顧問)
蟹瀬令子	(ケイ・アソシエイツ　取締役社長)
北城恪太郎	(日本アイ・ビー・エム　最高顧問)
木下利彦	(ドクタージャパン　代表取締役)
喜吉　憲	(カルチュア・コンビニエンス・クラブ　顧問)
桐原敏郎	(日本テクニカルシステム　取締役社長)
楠本和弘	(ネットチャート　取締役社長)
倉田　進	(KURATA and ASSOCIATES　東京オフィス代表)
倉橋　泰	(ぱど　取締役社長)
髙坂節三	(コンパスプロバイダーズL. L. C. ゼネラルパートナー 日本代表)
小島秀樹	(小島国際法律事務所　弁護士・代表パートナー)
斎藤聖美	(ジェイ・ボンド東短証券　取締役社長)
坂田　明	(明豊ファシリティワークス　取締役社長)
笹山幸嗣	(メザニン　代表取締役)
澤　尚道	(ビー・エヌ・ピー・パリバアセットマネジメント 常務取締役)
篠田紘明	(バンテック　取締役会長)
清水雄輔	(キッツ　最高顧問)
志村康昌	(ＵＣＣ上島珈琲　取締役副社長)
下村朱美	(シェイプアップハウス　代表取締役)
杉本哲哉	(マクロミル　取締役会長兼社長)

関　　誠　夫	(千代田化工建設　相談役)
高　木　邦　格	(国際医療福祉大学　理事長)
髙　田　正　澄	(ネスレ日本　取締役兼専務執行役員)
高　橋　　衛	(ドイツ証券　常勤監査役)
竹　川　節　男	(健育会　理事長)
武　田　幸　男	(ファイザー　執行役員)
竹　中　　誉	(エル・ビー・エス　取締役会長)
谷　本　　肇	(リアルコム　代表取締役)
谷　家　　衛	(あすかアセットマネジメントリミテッド　代表・CEO)
田　幡　直　樹	(ＲＨＪインターナショナル・ジャパン エグゼクティブシニアアドバイザー)
田　村　哲　夫	(青葉学園（東京医療保健大学）　理事長)
寺　澤　則　忠	(三菱地所　顧問)
戸　須　昭　雄	(東通産業　取締役社長)
富　田　純　明	(日進レンタカー　取締役会長)
長　江　洋　一	(六興電気　取締役兼代表執行役社長)
長　久　　厚	(ラクオリア創薬　取締役社長&CEO)
中　村　春　雄	(モルガン・スタンレー証券　代表取締役)
西　村　英　俊	(双日　顧問)
野　口　忠　彦	(大林組　専務取締役)
芳　賀　日登美	(マンパワー・ジャパン　専務執行役員)
長谷川　暁　子	(日動画廊　専務取締役)
畠　山　　襄	(国際経済交流財団　会長)
波多野　敬　雄	(学習院　院長)

浜田　宏	(ＨＯＹＡ　取締役, 執行役最高執行責任者)
林　達夫	(アークデザイン　取締役社長)
原田靖博	(格付投資情報センター　特別顧問)
坂東眞理子	(昭和女子大学　学長)
樋口智一	(ヤマダイ食品　取締役会長兼社長)
久野正人	(ベックマン・コールター　取締役社長)
日高信彦	(ガートナー　ジャパン　取締役社長)
平井康文	(シスコシステムズ　副社長)
平田　正	(協和発酵キリン　名誉相談役)
平野正雄	(カーライル・ジャパン・エルエルシー ﾏﾈｰｼﾞﾝｸﾞﾃﾞｨﾚｸﾀｰ、日本共同代表)
福川伸次	(機械産業記念事業財団　会長)
福島吉治	(Ｆ＆Ｋコンサルティング　取締役会長)
藤原美喜子	(アルファ・アソシエイツ　取締役社長)
古内耕太郎	(燦ホールディングス　取締役社長)
古沢熙一郎	(中央三井トラスト・ホールディングス　取締役会長)
辺見芳弘	(インテグラル　取締役パートナー)
堀　新太郎	(ベインキャピタル・ジャパン 会長・シニアエグゼクティブ)
松井秀文	(ゴールドリボン・ネットワーク　理事長)
松岡　昇	(モリテックス　取締役専務)
松﨑昭雄	(森永製菓　顧問)
松島正之	(クレディ・スイス証券　会長)
松村謙三	(プリヴェ企業再生グループ　取締役社長)

松　室　哲　生	(ブイネット・ジャパン　取締役社長)
松　本　　洋	(アドベント インターナショナル　取締役社長)
三　嶋　希　之	(大成ロテック　相談役)
宮　城　利　行	(ティーガイア　取締役会長)
村　田　嘉　一	(日立製作所　名誉顧問)
森　川　徹　治	(ディーバ　取締役社長)
森　島　英　一	(佐世保重工業　取締役社長)
安　田　育　生	(ピナクル　取締役会長＆CEO)
山　岡　建　夫	(ＪＵＫＩ　取締役会長)
山　崎　伸　治	(シニアコミュニケーション　取締役社長)
山　中　祥　弘	(ハリウッド大学院大学　学長)
山　梨　広　一	(ﾏｯｷﾝｾﾞｰ･ｱﾝﾄﾞ･ｶﾝﾊﾟﾆｰ･ｲﾝｸ･ｼﾞｬﾊﾟﾝ　ディレクター)
吉　沢　正　道	(ロングリーチグループ　代表取締役)
渡　邊　喜　雄	(カインドウェア　取締役社長)
鰐　渕　美惠子	(銀座テーラーグループ　取締役社長)

以上119名

事務局

太　田　　篤	(経済同友会　担当執行役)
織　田　由紀子	(経済同友会　教育交流部 アソシエイト・マネジャー)